おばけとかみなりさま

―幼いきょうだいと暮らす―

藤津　麻里

「ママ、おばけがいるよ」。長男がそう言い出したのは、二歳をちょっと過ぎた頃だったと思います。私たちが住んでいる3DKのアパートの北側の六畳間は湿気がひどいため、物置となっていて、普段は開かずの間。そこにおばけがいるというのです。

「おばけ」なんて、どこでそんなアイディアを仕入れてきたのかしら？　日中預けているベビーホームで、そんな話題が出ているのかな。そう思いながら私が襖を開けると、長男は乱雑な部屋の中を指さして「あれがおばけ」と言いました。散らかったものを一つずつ指さしながら「これ？

これ？」と私が聞いてみると、小さな灰色のマットを「うん、それがおばけ」。このマットは、チャイルドシートに新生児を乗せる時に使うものなのですが、我が家では使用する機会がなく、開かずの間にしまいっぱなしになっていたのです。

後日、またこの部屋の襖を開けると、後ろから覗きこんだ長男が「あっ、おばけ」とまた指さします。今度は、ハンガーに吊してあった私のマタニティドレス。うーん、灰色のマットもマタニティドレスも、どちらもテローンとのっぺらぼうな形状で、確かにおばけらしく見えないこともないのですが……ほんとうにこれを「おばけ」だと思っているのかな。子どもの言葉は、あまり額面どおりに受け取りすぎると本質を見失ってしまうような気がします。彼にとっては「もの」はそれほど重要ではなくて、普段開けられることのない部屋の中に「おばけがいるつもり」になって、その気分を楽しんでいたのでしょう。

そのうち、この部屋に住むおばけは、いつからか、長男のトイレトレーニングの仲間ともいえる存在になりました。というのは、この開かずの間はトイレのすぐ横にあるのです。何がきっかけだったのかは定かでないのですが、トイレで長男がおしっこをすませた後、私とこんな会話をするようになったのです。

私（おばけになって）「なおくん（長男の呼び名）おしっこできたの？」

長男「できたよ」

私「ぼくもできたよ。でも、ちょっとぬれちゃったの」

長男「パンツかえな、おばけ」

私「うん、かえるね」

長男「ピポピポパンツにしな」

ピポピポパンツというのは、長男がお気に入り

の、パトカーの絵がついたパンツのことです。私がおばけを演じ、長男がおばけにアドバイスするのがいつものパターン。長男の方から、「おばけ、ここ（便器）に上手におしっこできたんだって」と話を始めることもあります。父親とトイレに行った時も同じようにしているのかと思っていたら、「ママとだけだよ」と夫に言われました。そうか、長男にとっては、「ママとする遊び」だったのか……。もしかしたら子どもの方が、私のごっこ遊びにつきあってくれていたのかな？

それでも、長男もこのおばけをちょっとした心の支えにしている節もあるのです。今日は一日中、なぜかおしっこに行くタイミングが合わず、何度もおもらしをしてしまいました。夕方にも父親とトイレに行った時に間に合わず、またパンツをぬらし、下半身ハダカで居間に戻ってきました。そして、笑顔で私に寄りかかりながら、「おばけ、パンツとズボンかえたんだって」と言いました。

「おばけも失敗してパンツをかえたんだ」という遊びをすることで、母親の私に甘えたい、そして、自分の失敗も別になんてことないんだ、とちょっぴり気持ちを立て直していたのかもしれません。

寝る前に「かみなりさま」が出るようになった

のも、おそらく長男が二歳になる前後の頃だったと思います。このかみなりさまは、完全に私たち親の側から仕掛けたもの。パジャマを着なかったり、おなかを出していたり、なかなか寝なかったりする長男に「そういうことをしていると、かみなりさまがおへそを取りに来る」と話したのです。「かみなりさまが窓の外から見てるよ！　おなかをしまって！　ふとんに入って！」と、私が窓の外の様子をうかがってみせます。夫が、赤ん坊の次男を抱いてかみなりさまになり、ナマハゲよろしく「寝てない子はいねぇか！」とドシンドシン歩いてきます。「キャー、ママかくれて！」と長男は私と一緒にふとんをかぶって大はしゃぎ。クスクス、こわいね、とふとんの中で囁きあいます。「寝てない子はいないか？　おかしいなあ。今日は帰るとするか」とかみなりさまは帰っていきます。「パパ！、かみなりさまになってえ！」と大喜びの長男。寝かせるはずが、かえって興奮させる結果になったこともありました。

このかみなりさまが出現して間もない時期に、『ふうじんくんとらいじんくん』（古川タク作　福音館書店　こどものとも年少版）という絵本に出会いました。俵屋宗達の風神雷神図屏風をモチーフにした作品で、風の神様の「ふうじんくん」と雷の神様の「らいじんくん」が、空で風を吹かせ、雷を鳴らしてコンサートをするという内容です。「ヒュー　ボワッ　ボロベビリバボ　ブハッ」などの擬音の面白さに笑ったり、画面の端にイタズラ描きのように描かれているサイドストーリーを喜んだり、何度も読んで親子で楽しみました。

この絵本の裏表紙には、ふうじんくんとらいじんくんが、風神雷神図と同じ構図で、屏風の上に描かれています。長男はそれを見て、「まどか

らじろじろ見てるよ」と言いました。

屏風の絵は、矢羽のような形をした窓からふうじんくんとらいじんくんがのぞいているようにも見えるのです。これもどうやら、「かみなりさまがおへそを取りに来て窓から見ている」という、寝る前の遊びとつながっていたようです。

このかみなりさま、最近はとんと姿を見せなくなりました。二歳八か月になった今では、寝る前に父親に絵本を読んでもらい、読み終わったら灯りを消して寝る、ということができるようになってきたのです。次男が二歳くらいになったら、またかみなりさまが必要になるのでしょうか……？　とにかく、一時は毎晩大活躍だったかみなりさまも、しばらく休息に入ったようです。

このおばけとかみなりさまの出現した時期をもっと正確に調べようと思い、とぎれとぎれにつけている育児日記を開いてみました。ところが、育児日記には、おばけやかみなりさまについての記録がほとんど何も残っていないのです。えーっ、ウソでしょう、あんなに何回もやってるのに……と、自分が記録していなかったことを意外に思いました。それだけ、おばけやかみなりさまは、私たちにとって日常的な、ささやかな出来事にすぎなかったのでしょう。ごっこ遊びでもあり、早く寝かせたいという親の思惑の産物でもあり……。子どもたちもいずれ、こんなことには鼻もひっかけなくなるのでしょうけれど。もうしばらくは、こんな架空の存在に助けられ、ごっこ遊びを楽しみながら、子育てしていくことになりそうです。

（会津若松市在住）